

凡 例

●項目分けに関してはまず季節で大別して章を構成し、ついで、筆者の独断と偏見で、関連性のある植物群を中別してタイトルを付した。そしてその中別した項に含まれる植物群には一つずつ植物名を記して解説した。各ページの左肩に記された 01-01-01-1 は最初の 01 が季節を、次の 01 が関連性のある植物群を、次の 01 が植物名を、最後の 1 がその植物が記されたページ数になっている。

●本文で植物そのものにかかわる記述はすべて墨色とした。また植物とは直接関係ないものでも古典的な文学や歴史等で、かかわりの深いものは墨色とした。

●植物から脱線した歴史や文学の詳述、音楽の歌詞等はこの色で表現した。

●関連項目や詳述が、他ページにある場合にはそのページを赤で記しリンクした。

●戦記物等で敵味方が交錯して分り難い部分では味方を緑で表したときには、この一族をすべて緑系の濃淡で表すように努め、人物名は細かく色分けして出来る限り整理しながら読み取れるよう配慮した。また男性は寒色系で、女性は暖色系とした。しかし登場人物が多過ぎたり、諸般の事情により、この通りに行っていないところもある点をご容赦いただきたい。

●植物の専門用語に関してはこの色を用いて、各セクションの下に簡単な解説を加え、再出したときにはページを付記してリンクするよう配慮した。また植物の構造に伴う名称は巻末に図示してリンクした。

●黄色の帯はフォントにないための当座の仮文字とした部分である。また今後さらに事実確認を必要とするものに対してもこの黄色帯を用いた。

●植物の専門用語、関連用語でも、ちょっと専門過ぎるものに関してはこの色で表記し、文中で詳述することは避けた。ネット等で検索いただければ幸いである。

●古典的な資料に関しては巻末に一覧表として、この色で表記しリンクした。

●ちょっと気になる植物や文学等にかかわる専門的な用語はこの色で表記した。ご興味のある方はインターネット等で最度検索いただければと思う。

●桜と椿の項で、かなり趣味の世界によったものを表記するときにはこの色を用いた。興味が持てなかったら飛ばしていただければ幸いである。

●この他にも注意を喚起するために、この色をつけた部分もある。

★見ようによっては煩雑ではあるが、色分けすることによって、選択的に読んだり、重点的に読んだり、漢楚攻防などでは敵味方をはっきり識別できて、理解しやすくなったと自画自賛している。デジタル書籍は単なる小説よりも、こんな馬鹿な脱線本や推理物、そしてとりわけカラー写真の多い書籍にはうってつけのように思う。とことん試行錯誤を交えながら色を付けてみた。目障りであったらこの場を借りて陳謝したい。

[目次に戻る](#)

後書・著者略歴・アシスタント

後書

『花の縁』を書き始めた頃、世の中はワープロなるものが登場して、10字前後の文字を活字のように打ち込むことができるようになった。東芝から『ルポ』と言う普及機が発売されたのである。同じ頃パソコンなるものが秋葉原の電気店で発売されるようになったが、50万円以上もする代物で、我々庶民には手が出なかった。携帯電話が出始めたのもその頃のこと、当初はバッテリーを背中にショって歩くほど大きくて、通話ができるものの利便性からすれば、公衆電話の方がずっとましだった。

それがこの20年のあいだにパソコンは誰もが、家庭でも職場でも使うものとなり、さらにデジカメだのスマホだの、新兵器が次々と登場し、これはまさに産業革命真っ只中であると感ぜざるを得なくなってきた。もはや在宅勤務の時代はそこまで見えてきたのである。技術革新の物凄さに、ただただ驚嘆するばかりである。

思えば20年前、植物のデータを集めるには図書館以外に手立てはなかった。講談社の『日本大百科全書』、『四季花暦』、小学館の『日本国語大辞典』などのコピーをとって、家に持ち帰り整理。1ページを作るのに1週間ぐらにかかることが多かった。それでこうした書籍を古本で揃えて、出窓に並べたから間もなく窓は開かなくなってしまった。ところが今ではネットで検索すれば瞬時にチェックできる。便利な時代になったものだが、買い込んだ書籍がなんとも空しく見える現状がある。

さてパソコン音痴だった筆者に一から指導をして下さったのは東京都大田区にある川島写真機店の諸兄や金子氏だった。特に金子氏はパソコンは仕事とは無関係であるのに天才的に詳しく、いろいろと教えて下さった。こうした師がいなかったら、この『花の縁』も完成することはできなかつただろう。そして筆者に農業関係、特にトマトやキュウリ、ナス、カボチャなどの栽培方法や、おいしい果実の見分け方などをお教えくださったのは、埼玉県深谷市で栽培農家を営んでいらっしゃる内田さんご夫婦で、春の七草や雑草、雑木類の知識を与えて下さったのは倉持通夫先生だった。皆様に感謝してやまない。また初期の段階でこの企画そのもののチェックを入れ下さったのは日本放送出版協会の諸兄、デジタル書籍に関する知識を色々と授けて下さったのはエイター(株)札本裕治社長と、中央公論事業出版社の佐藤咲氏、HPの開設に力を与えてくださったのはパソコン達人、市川湊氏であった。皆様のよきご指導があって、この『花の縁』を完成させることができたことを感謝してやまない。この場を借りて心より御礼申し上げるしだいである。

2015年11月27日 山田案山子

【著者略歴】

本名は、藤井 建（1943. 11. 27 生まれ）
早稲田大学第一文学部卒業後、広告会社に入社。
クリエイティブ局にてコピーライターとして、
ヤマハ発動機、三越などのキャンペーンに携わる。
その後営業局に異動して大林組、フジテレビ等の
アカウント・エグゼクティブを務める。

1996年には大林組の日経広告賞受賞に寄与する。
フジテレビ局『楽しくなければテレビじゃない』
の時代に、バザールでゴザールや団子三兄弟の
佐藤雅彦氏、ソフトバンクでおなじみイヌのCMを
製作している佐々木宏氏とともに、『哲学』で
カンヌ国際広告フェスティバルにて広告賞受賞。
その後、佐々木宏氏、タグボートの岡康道氏と
フジテレビのお台場移転キャンペーン等に携わる。
電子書籍『仔猫こもらった91日間の幸せ』がある。



山田案山子のアドレス：takeru07@ab.auone-net.jp お問い合わせ等はこちらまでお願いします。

[目次に戻る](#)

よきアシスタント

この撮影中、小生と行動をとにしたのはこのジュン♂である。長野県佐久市の駒場公園で拾ったのがジュンとの最初の出会いであった。生後1ヶ月も経っていない頃で、2001年6月3日のことである。それでジュンと名づけたのだが、筆者にはすぐになついて、クルマに乗ることも厭わなかった。シヤムとアメショーのハーブで、純血種でなかったために捨てられたらしい。以来、クルマの助手席に乗って、北は仙台から南は徳島まで、毎回撮影旅行の助手を務めた。彼の走行距離はおそらく5万キロ程度になるだろう。乗鞍岳のふもとと一緒に星空を見たこともあったし、上高地で河童橋を渡ったこともあった。それに戸隠神社の参道を一緒に歩いたこともある。一度、銀座の歩行者天国へ連れて行ったが、さすがに人の多さにびっくりしてか、植え込みにもぐりこもうとすることが多かった。しかしいつでも筆者の後を着いて歩き、滅多にはぐれることはなかった。それでも3度ばかりはぐれそうになったが、すべて5時間後には、どこからともなくクルマに戻ってきた。猫の体内時計は5時間刻みになっているのかもしれない。しかしそのたびごとに車の中で一晩明かす覚悟を決めていたことも事実である。

ジュンは特に波の音が嫌いで、海では背中によじ登って来るが多かったから、どこへ連れて行っても人気者で、人を恐れたり爪を立てることもなかった。房総海岸あたりでお会いした方も多かったと思う。あれから10余年、もうお互い老人である。今ではジュンを看取ってから他界したいものと思っている。



ジュンはまだ 2015 年 6 月で 14 歳になる。いまだにパソコンの隣で、小生の作業を見守っている。